



伊勢參宮名所圖會
附錄
一上

ル 4
3526
7





門 儿 6
號 3526
卷 7

伊勢參宮名所圖會附錄

目錄

長等山 希山中

三井寺 岡山教待の寺

祖寺・中真祖智池
大師堂・小堂・後若明津・南院正法寺札不親着
北院寺・三重塔・黃不動堂・又社并相殿・三柵杉・沖影川・龜鳴橋・飛ヶ岳
・文殊過・多支水・尼ヶ池・子園子・十八神・金堂・圓伽井・月見池・五名燈・村
雲捨・新陸・古陸并儀及右の寺・食米并子傍禰・廣一寺・經堂・角井屋發
・發蔓泥羅・女人三再活
・三院三板者

五別所

尾苑寺 堂尾八幡・源八社
堂尾阿闍梨墓・一持三面佛
如來堂・子持佛・燈名号・獨活水
鐘樓・菩提樹・安持和尚石塔

微妙寺 明王堂
美師堂

近松寺 如來堂

燈名号・獨活水
鐘樓・菩提樹・安持和尚石塔

常在寺 水觀寺

湖水 日磯橋・竹生寺并松室仲菟仙童毘毘の寺・多奈寺・沖ノ橋・水荳
園・破山・松原橋・長命寺山・八幡山・黒津・白石・支那・志向山

湖中船

魚

俚言

湖上風土

日産物

日洲寄

日瀧

日山

日八景

日神社佛圖

古城

日陵墓

昭和六年一月十日
尼野貴英氏贈

△月人物 佐々木・沙井・蒲生・織田信長・右衛門秀吉・傳教大師・飯沼貞
 宗・大石玄良・小村孝吟・僧元政
 △猿丸老更田路 △余五湖 △錦織里 △志賀故御赤塚
 寺・見世 △大津舊都 天智天皇の御所
 文武天皇の御所
 △志賀山城 △貫之祠 △黒豆祠 △志賀山中城趾
 △志賀寺舊趾 希上人の御所
 御息所の御所
 △美松院旧趾 △美葛原 △穴 古
 △十王堂 △明智寺 希彦 古殿 △大権現御廟 △元善如堂
 慈眼大師廟 三佛堂
 △栞宮
 △日吉山王七社 希 攝属十四社 末社 麓亮倉并乾臺
 法師の御所
 ・衣掛石・佛院・七核和歌・白毫院石窟・渡邊石
 ・美妙庵・御恥石・明星水・元三大師堂・大政所
 △月祭禮 栞選御の列并 御輿振 七本柳 松中後御ヨ三ヤ
 落し等の細記 △両社明神 △明智城趾

附目

△唐 山寄 日明神 希 孤松の古記 日後 山王松中供御
 △西教寺 △比叡过 △来迎寺 △苗 藤
 △雄琴里 △堅田 希多彦 神酒浦 磐ゲ池 燈津 山洋智寺
 濃月堂 子持佛 観音堂 衣川 山天神
 △美野入江 △和 尔 △比良山 日獅子岩 △小松 浸揚梅
 △登 岩 △白鬚大明神 △抄下里 △大 溝



三井寺開山教待
 天智天皇遷都の後佛刹建立の
 勅諭ありしに未だその
 勝地を得ず二月三日
 此夜の夢に乾潤をまじ
 て靈區と奏すと云ん
 後人其地を抄いて村を
 大石石川忠茂等
 勅して是を拓せし
 りふ山中瀑布の傍に
 優婆塞寺を梵涌
 石後岡とも云ふるは
 其地止むる者みよ
 是必及土すべし
 されば帝愛のゆえに合
 せ給ひし即其地に終焉
 ありまじく大なる命
 命ト云

附ノ二

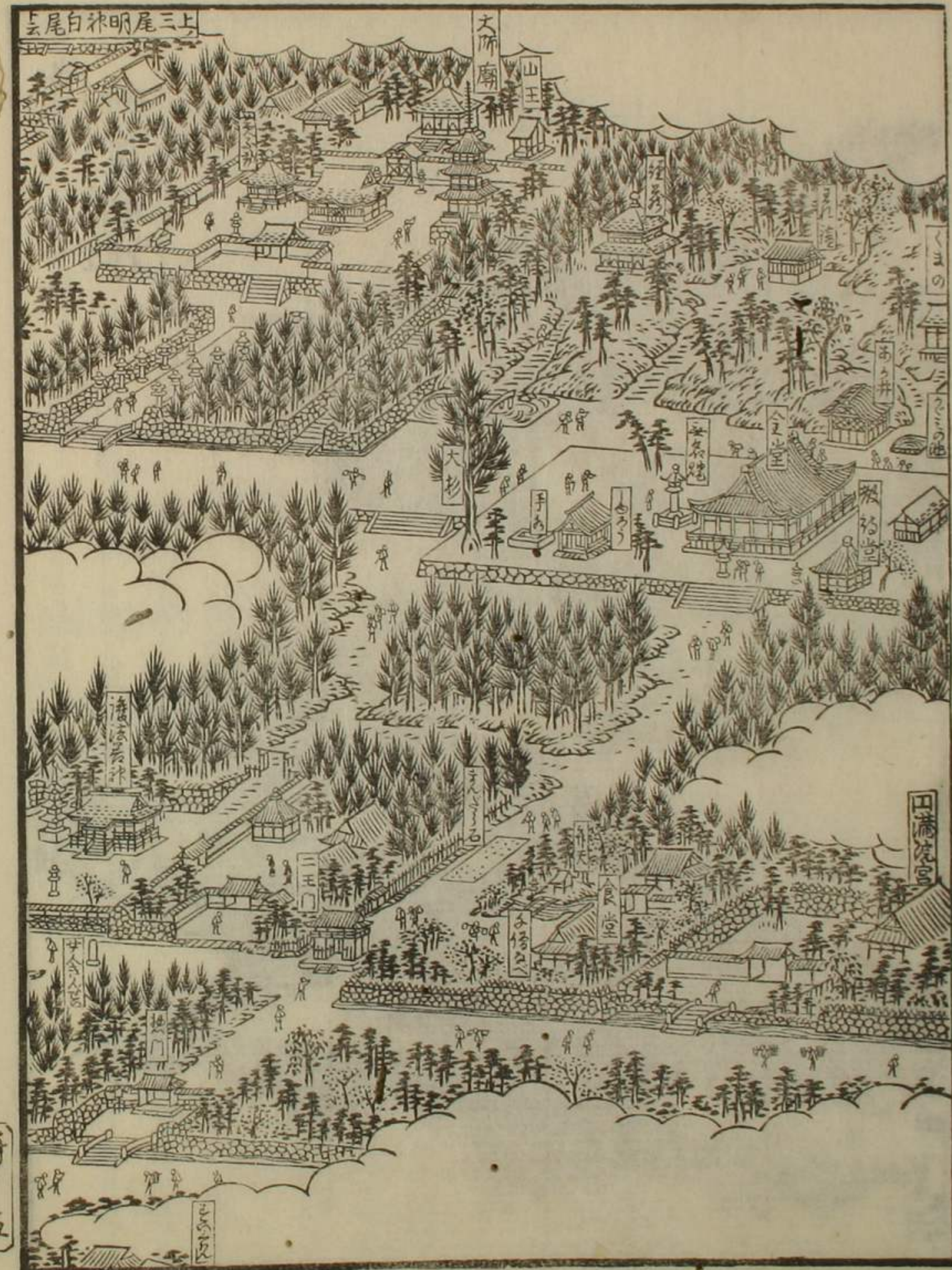


精舎内建しは後
 号して崇福寺と
 又或は建後寺
 なる入地後建これ
 志守寺の開基よ
 して三井寺
 神樂の古名
 あり



三井寺
新羅明神

○祖堂同基の祖金重の後より入定之地とも云。傳曰優婆塞教待居士
 の後園の人とも云。凡そ久しく園城寺と居候して對新羅不食附、湖邊に
 出く魚鱈を釣とてみんとさきど同基の寺の地園にもありて此等より多經
 り百二十五年焼く寺門と園城に附屬し舊地にて嚴然と屏く其石室は妙なる
 魚鱈の骨悉く蓮と化ししなり。三空感應縁を御師子園西の地より所詮嚴然後これと
 聚つて隈む不男けて無き園とも云。曰辨甲香餅は數り園聚を其地は龜
 甲樹あり教待志を志を日とる傳地村の教志とら道士ありて此等の別不
 復り教待三井寺より其別不の路を志の林を志るるよ本之候の御志若
 集城道の願あり候ふ今もあつて其志瓜瓜の今候を志るる。毎年十月十日祭の
 ○智證大師堂 中真用心の授の大師尊像智辨日遺骨を納むこれと唐泥
 の人新羅宿坊香養坊智法智法園城の謚之大師の和氏より後那那河郡の
 人之父の宅成母の依伯氏弘法のふみの出たり私任の志の源源みく眼も重腫を
 視し天竺總教幼はして老成の志あり附し金倉寺に於て或疾天女來りて
 智法大師は深き其母八歳父も來て因果經と讀んで志を志と志を志と志を
 十歳めて菟經魯論史文選を讀十にりて志の志一治して志真と師と
 志く志く十九九九菟經一山は梅り一紀十三年仁壽三年秋八月九月偶唐
 の商人飲良暉は便航して海に志ぶ此年掉の張三日





附ノ六

のりれぬじて行身ぞりろくの神も佛も我とてなり

園珍

貞十八日唐の苑南福及界と云く大中九年長安善徳寺に入り興善寺三
義を見悉く法を一遍と稱し同十二年其又商人李延寿
又復初して序綱と此唐天即所得の台案の密義及び諸宗經書一巻尚
書者又納む此抄いく勅して唐院を園城寺と營み唐末の佛像經籍佛舎
利大日金の冠眼の菱鞋灌頂の具釈迦金樓の如法法差多安を以て
佛法灌頂の石場と云ふ又抄いく三母の總基再び記より年二十六より
延曆寺の座主と爲る徳蓋厚く王法の師範と爲る寛平三年を十月
廿九日寂と竟又叡山南谷に葬る其送骨を唐坊に納め延長八年を十月
智澄大師と謚すの神事同二日一夜傳説ありて法法を授けしを世に
○黄不動の元より智徳入唐の時風起りて播を擲く其播を彫刻し
金也又かえり黄不動彩るなり号く

○三重塔 土師寺の在りぬ 本名釈迦文殊普賢 ○村雲の橋 門前の
○五社 新羅明神。三尾明神。護法普神。新宮燈現。十八神上

○新羅明神 小院 現在在石の徳座之祭神素戔嗚命本地文殊之素戔嗚命
又十猛神と師て新羅國よりくる園城寺の神其船中の教籍と擁護

附七

て此朝(う)り三母寺に法をうりぬみこれを新羅とて明神定ぬ
現在と云ふ此の瓜現を台と云 瓜現の神は瓜をりしりとも不説の者なり
映九月明を始て祭祀と今も九月廿一日佐竹家より供物あり

か、私みのりれりりとこいぬる物をとれとまりに
新羅法樂の歌の會は俊敷慶賤の巻ありそれなり今もありて歌の法樂を供する

新羅より三母の流とて年よりきて歳位位へと神のまを 兼邦

相殿。般若 後持持命 ○宿王 天照大神 ○宿王神子 本地宿王垂
三柵板 明神の靈を要するなり ○沖新川 明神の流

○後古来流曰 三母寺の新羅明神とやんぐるき神之守治との神所は高野所園
相本ありたりる宝殿の妻戸より御衣の神より出たり祇園の宝殿の中より出たり

とかりんつみ延之の燈この付和祭の燈をその流とてせらるるんせらるるん及びて
其の中は溝ありこれに流入するなり

○後冷泉院の御付世間といへりかむる年ならひの園の造りぬ社をたたりて

○後古来流曰 三母寺の新羅明神とやんぐるき神之守治との神所は高野所園
相本ありたりる宝殿の妻戸より御衣の神より出たり祇園の宝殿の中より出たり
とかりんつみ延之の燈この付和祭の燈をその流とてせらるるんせらるるん及びて
其の中は溝ありこれに流入するなり

外記あり兵衛府生時重をたゞく六衛府のりども社を造り赤靈會の
たり祇園の中ろくをいひる

亀鳴橋 ○龜が園のまつりあり
後拾遺集

一万代より代をうごのくいのくゝ龜の雲から松のくぐり

式部大夫
資業

世龜が兵衛府冷泉院の法府大嘗會所原同遊に國龜が丘に松の樹まきと云画歌を三丹寺社に
父珠が過 ○安樂堂後醍醐天皇の御時 徳光と云て人の性まはれ禁を其不の本のまきと云

三尾大明神 南家琴緒台の法主之再建 ○惶根 ○俣岸法師 ○日雷女

これを三尾の神といふ又白尾の尾赤尾と稱之又云此神三尾の白尾をまきと

多尾の水尾より大津の浦より其浦と大波止又寄嶋とも云て社に三社又

但と丘と神柱の石あり天人降りて琴を弾く友と琴を緒台といふと云

毎年三月中の卯これを祭ると別と三尾又強と ○琴尾台と云 ○筒井台

白尾 ○鹿岡尾
護法音神 中谷の法守之又尾護法音神ともいふ

西方の英人かりり又尾護法音神のちういありて訶利帝母のちういありて

又圓子 毎年 十六日 此音神の神帳をいりきて法味成薦む又諸人團

子を法味成薦むの神帳をいりきて近郷より群衆を

附ノ八

新宮権現 神出村の法主之 又月音神と云乃山王権現之天安二年 智徳新羅

公王と云々寺々来り新羅宮を止る山王の敷山より降りるるも智徳其

新宮の地は社分と云々寺記曰天喜二年 因満院明之此宮をこの藤原

遷し如と圖て其巷をいひて神出村と云又改めて新宮と云旧社の地今知

者あり又智徳の廟の後にも山王権現あり

十八神の南谷音神の法守あり 伽藍の守護神之是利也 已上五社

熊野權現 熊野の傳曰平治元年長更前大僧正幼芝の勸法

佐右大明神 小流の法守たり又永又奉 澄辨僧正の勸法

金堂 圓伽藍の源也 亦る餘勸佛 東向に同に面法其長息女 智徳五著天親の二言

其長一丈六尺 二推右天皇勸佛 三三尊武天皇の應制

砂金又百両を鑄て携む長に四の終基菩薩自他利佛 長尺寸 五佛堂圓白

道長の本尊像の像長七 六六職冠持卷の亦る 七寸二分 七八作人未詳金像

長一丈六尺 圓伽藍の源也 亦る餘勸佛 東向に同に面法其長息女 智徳五著天親の二言

圓伽井 三尊之金堂西階の地也して金堂ありとも云九段の龍をいひ護と云つり

日辺畫圖を云霞つり園内の鏡板龍の画右法眼破風の終九其尺帛 圓伽とい浄水の梵



村雲橋

三母寺智徳大師此橋の上より
 のりて西去大佛刹の回縁と
 なる一即西方に向て瀑水の
 印と橋の終へハ忽一塊の石
 死りてまじく西方ニ崩れ
 其後信の終るまじ
 ハ回縁ハ極雨のさるう
 遠く消滅せり



○月見池

○鐘の池 昔三井の傍あり

○無名池

○鐘の池 昔三井の傍あり

の宝澤又元の白石を得たり家を帝衣の無名指を折てとよにの
蛇撞石壇のり埋納むを無名池と云ふ也此後寺の遷す

○古鐘

○古鐘 金朝の傍に在り此秀御龍宮と云ふ也此後寺の遷す
止り物なるは古鐘といふ也此後寺の遷す
其例ありとも一但一龍宮の地なりと云ふ也
若し其の江原栗津は慶江寺を建る佛殿諸堂成龍のう鐘を鑄んとして藏を出
雲の團まを歩踏は無風吹て私を西後(と)とて時を暮す一人小舟を挿りて
龍宮之月より我春福を大蛇のさし食りぬ今汝が勇力なるは知つてかか
秋く其故を我さしと云ふ也此後寺の遷す
其の時守府の軍清辨其金百を此とて賞えて三井寺を建る也此慶江寺
の鐘の末寺なり其三井寺と云ふ鐘の中なり此鐘を三井寺と云ふ也此
とて慶江寺の傍なり此鐘を三井寺と云ふ也此鐘の中なり此鐘を三井寺と云ふ也
名も波や三井の古鐘といふ也昔より人知るも是なりと云ふ也 定因

○新鐘

合寺の 文禄年中大同秀吉公建立と云ふ

鐘の記文二日

請特蒙十方檀那助成修造江州三井寺之堂社状
伏惟阿難尊者傳持佛法乘賣釈尊教勅為清度衆生也。優填王刻如來尊容

亦任金口之附屬為利益國家也。抑當寺者天智天武持統三代勅願之精舍
教待和尚草創也天台真言俱舍三宗兼學之練若智證大師再興也。有八功
德之水和修吉龍王所攝矣。為無熱池之流奉天子御產湯焉。依之玉躰無
恙。叙運無煩。自介稱三井寺。佛法繁榮日尚矣。於此乎。生身強勤。降自都率結
三會。值遇之緣。天竺名鐘。出自龍宮。鎮唱諸行。無常之理。借考古記。温來由須
達長者。建祇園。精舍十大弟子。鑄四方梵鐘。今此寺之鐘。其隨一者乎。或時顯金
胎。兩部諸尊。或時現三世諸佛。相好如之。天下有凶年。則汗流粟漚。民間謳太
平。則音澄響高。傳度聽鐘聲。永免三惡。苦熱人。不運步何輩。不拜之就中。吾
大師者。大聖不動。變作蓋真言。上乘密義。救世觀音。示現窮天台法華淵源。平
刺。准釋尊若行。攀大嶺。葛城之嶮。岨。覓役優婆塞。跡司熊野山之檢。按障者降
伏之勅。矣。招福之祈。靈驗追日新。法威無落地矣。然問四海安全。仰任三井
觀。祈王法。長久偏依。大師法德。寺門名譽。不可勝計者乎。唯恨建武之昔。燒失
七百餘宇。為凶賊。都為焦土。曆應之古造。管一百有餘。亦為雨露。頹毀悲歎無
限。愁鬱幾計矣。爰某忘躬。不堪捧一紙化書。意馬急鞭。敲十方檀門。信心貴賤。有焉
則布千金。萬斛。道俗尼女。無焉。則施一紙半錢。宛如不厭。巨海於流。頗等不
嫌。大山於片塵。若夫脩造功畢。結緣隨喜。群類現世安穩。而者千祥。万吉。自由
自在。渴仰皈依。緇素後生。善處而者。三身萬德。無邊無窮。都而自界他界。有緣
無緣。親踈遠近。平等普利。仍勸緣之趣。蓋以如斯

聖護院 道澄書

○食堂

○食堂 二王門の中を釈伽如來
○文僧の精舎 食堂の傍にあり
其古物なりこれをもて是を二王門の造りにもありて大衆の食端なり



依^た反^り古^き秀^{しゆ}郷^{ごう}
 獲^と十^{じゆ}種^{しゆ}家^か
 於^お龍^{りゆう}宮^{みや}
 三^{さん}井^い寺^じの^の名^な尾^び種^{しゆ}
 如^{ごと}十^{じゆ}種^{しゆ}の^の其^{その}一^{いつ}也^{なり}
 と^りり



山門の衆徒三再寺の
 禿を奪ひ返し御寺台
 中へ擲げんと



附十三



三井寺
女人清

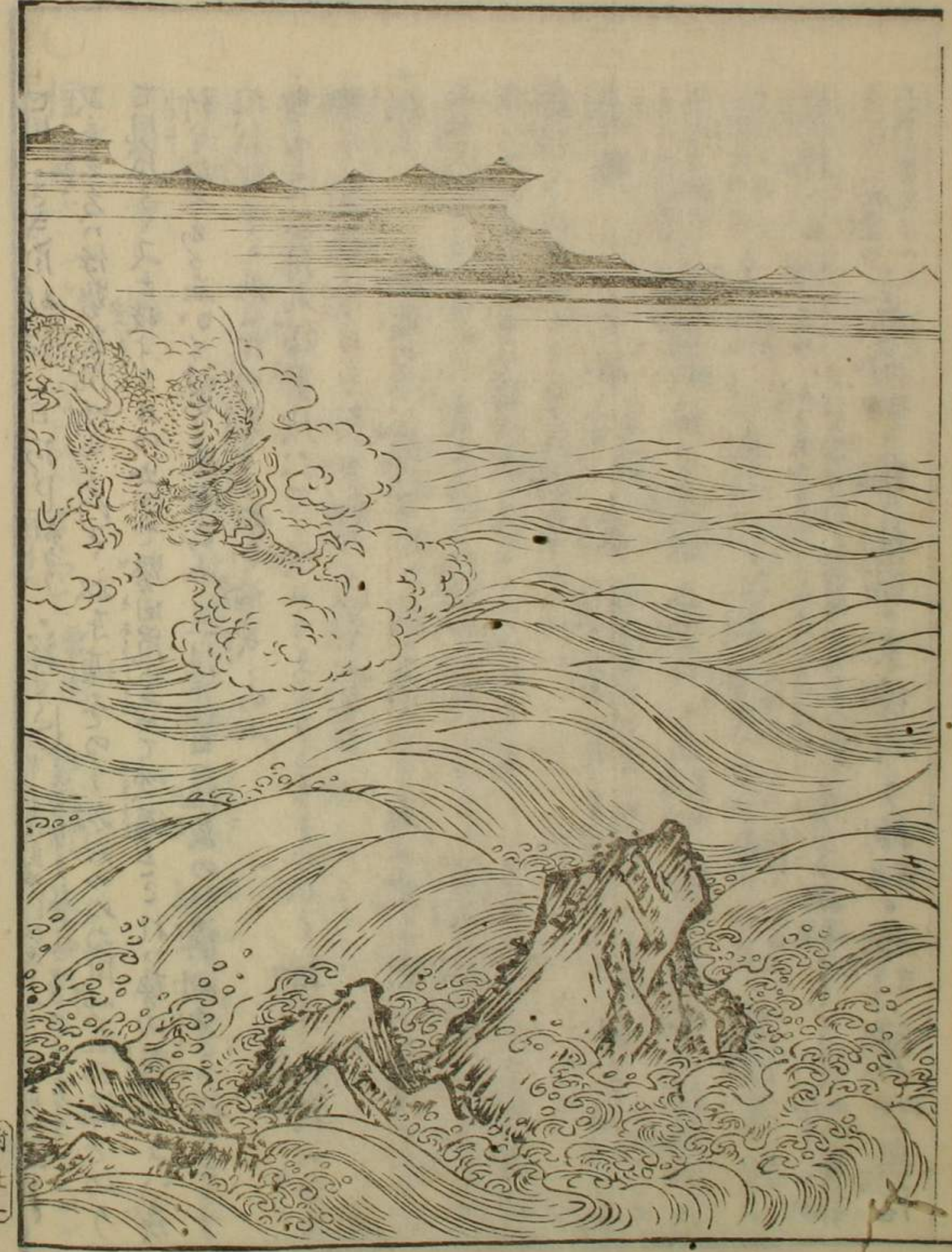




近松寺山頂安塔塔
 希 湖上至堂の風景
 見ゆると林華の大津の里にて舟出で
 遊ぶより之此里の一園を其の習
 をのべすおまなをく相板を
 首に足すして船石場より
 九の巖の塔と一尾尖の沖
 の立石にみく尾花川を右の
 巖とせり九より首板をくせ
 日吉比良の石根を始として
 雲田若宮彦彦彦の河橋
 なるは天の橋立の巖をも
 かう入るるがさく海にひくよ
 遠くをくくく其の上にはま
 物舟をくくくかかかよりや
 と同じくやちりくくく見
 中るくくく海の浪りに
 頃代引くくくくえ



まげ神の修多寺塔長命寺
 九の八橋の城松多塔の山い観
 くらくくく山橋三三との合
 灰塚山合勝と名向りり甲塚山
 田上佐左右に顧るわやて其
 中をよとくくくくくくく
 とくもあはれ武財のきか
 殿よおほい止らるれ且
 かく松竹生塔ちん
 とうてららる浪岡
 海いさんとも
 とんかんちん
 其の園とれ
 其の園とれ
 けん





三つむしのちん
松室仲算
せん
慕仙童

山○溪樂山○守山

近江八景 湖氷の結凍をみれば良辰田より三井るらつりたり 明應九年八月十三

日近湯政教を尚通るより佐々木高松の相違よりこれ及び梅園あり

○神社佛園

○白髮明神

破明神 日本武尊 多賀 大上郡之東 神傳

○月吉王

筑廣明神 彌生 日月神 此神の所りりし

○建部

報奇八幡 水尾 牛頭村 大宝村 小津

○兵主社

倭吹社 日本武尊 苗麻社 天智帝七

○大上社

信託あり 岩清水 八幡 月中山 依々本宮 倭香

○郡大音明神

倭吹あり 粟見天神 長濱之隣 里十郷の氏神

○新羅大明神

三井 日宮津 八幡宮 豊

○満津

倭吹あり 宇賀神 佐神 志丸 天神 長根山 歳津彦 根命

○觀音

上野河原 觀音 日本金山の路りり

○三井寺

西教寺 西天台

○浮御堂

三井寺 岩間寺 石山 長命寺 竹生 共々西

○不動

猪俣 掉飛 交取地 荒岩 本本地 荒岩 石塔寺

○平流山

高野 永源寺 番場 辻堂 池

○百濟寺

心泉寺 收満寺 龍

○松尾寺

瓦屋寺 武佐寺 雞足寺

○菅山寺

安芸山 徳見寺 親善寺

○綿織寺

武佐寺 雞足寺

○浄信寺

雞足寺

○長尾寺

野須 中親寺 野須 中親寺

○野寺

野須 中親寺

○建立の寺

石塔寺 阿弥陀寺 金剛寺 親善寺 徹寺 味六寺 勝華

○日向寺

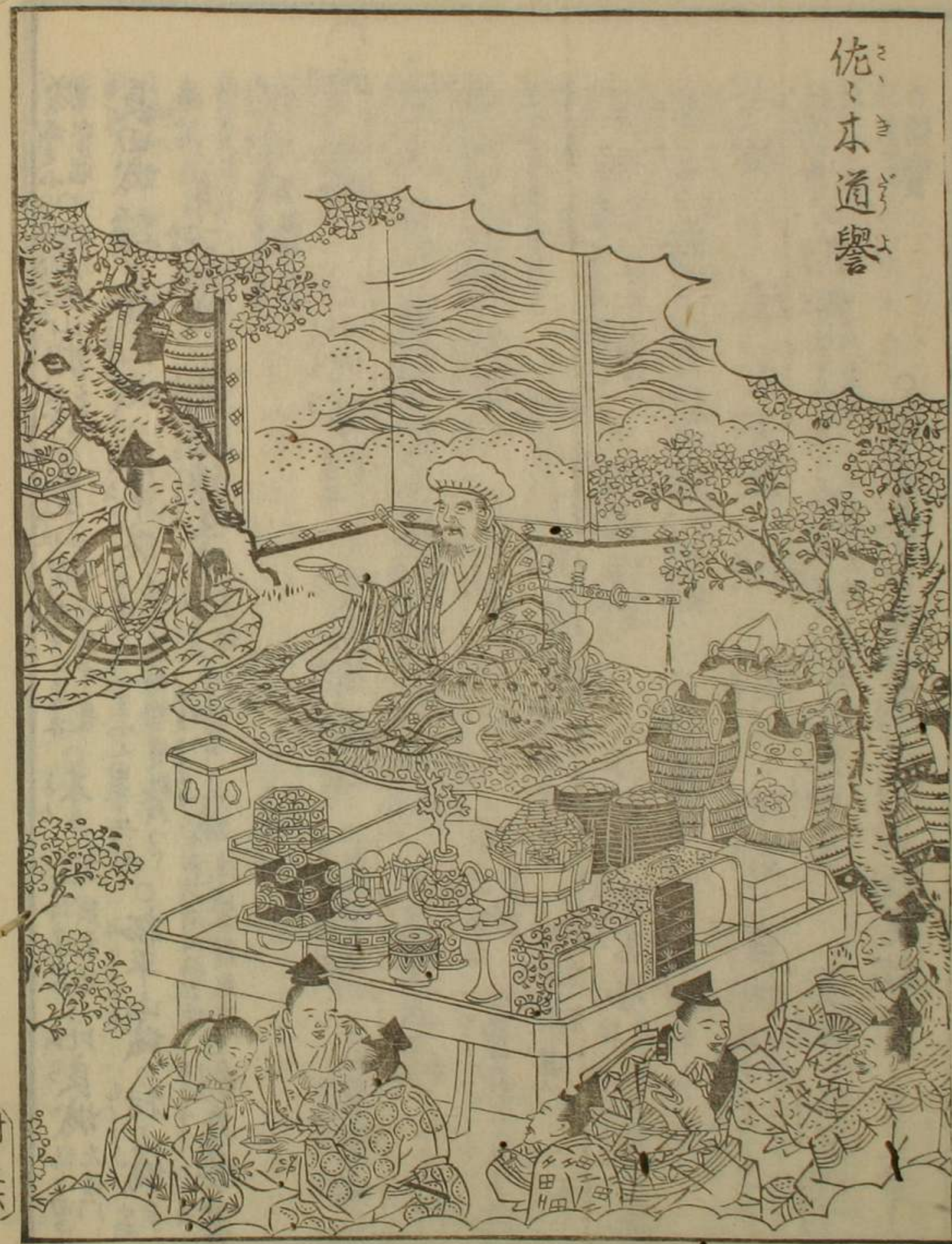
般若寺 長溪御堂 卒田明照寺 等して

○古城

觀音城 巽佐城 和田山城 懸江城



佐々木道譽



ちく源の姓は湯戸に兵庫助成の近江佐々木の莊に住居し多秀
義はより又世の孫に保元の乱に義朝の後ひ平治の乱に恩深を義平に属
と兼田政重等と十六騎平重盛が又百騎を破る義朝卒とらん及んて秀
義の近江に遷り莊戸に罷て困窮し押うひ樹つとて淡奥に赴く踏浪台
莊戸平重國かまが護勇を遣して婚と成る義法誕生て此四年を經る
源頼朝信長國に流るれははて息定頼盛頼朝をて安否を伺ひて
絶ど頼朝兵兵をうらむ及んで又近江國甲斐具敷にて大原の莊に於て平
田家継と我ひ矣中て絶て時年七十二没後の堂あり息入る終る頼朝を
備護して覇者の功を建しむ五子の傳ひ人の知るをわかれが思ふ
○鎌倉源氏の初代より三十六人の國衆八十二人の御侍ありる氏卿の附二國悉
佐渡判友道譽 曰ち支判官氏於屬と此附に及二ツ別して豊智川
より南を江南佐々木六角とひく赤網これを免と小と江北佐々木系極と
ひひく高氏これを免と高氏の道譽のよりうと定綱五女の子孫とひく
左衛門尉檢非違使の任よりうと道譽の系師系極も位と赤網の六角も
遷る友より孫の氏とて系極の六角と稱とせ近江の守護とて憲
仁の比より高氏文龜の比より氏綱永正の比より定朝弘治の比より義賢又天
正より義朝とて後てこれを官位職とひく又敏とも云

○佐々木高氏 佐渡判友とてり小系三村と共り別發して道譽と云ふ時
後醍醐帝を隠岐國に遷しなり道譽これを供奉せりる時が流傳日々に
起過るとして頼朝と支判官尊氏を獎して遂にこれより頼朝箱根の軍を率
と我ひ竹のわたり官軍と破る平三年高師重の後ひて捕正頼朝に系極も
政より初我死と其後義詮は後ひ系師をもちて官軍と争ふ又敵陣
八相山の險難に進むと我と奮戦して大に破る其後又義詮は後ひ系師と
守るより七年此系師後軍功多く二心と不懐して義詮遂に征夷將軍と拜せり
る佐々木道譽其功を誇り驕奢日々に盛んるれば二村の武人の田園と桑木
を奪ひ取りたるを命じて佛法隱の祖の杖と柄をひ此狼藉より起りて割へ
官院を焼むらひ院衆を悉く捕ふ親王踐踏して僅に脱し終るより息秀
綱かゝるも近うて捕せられこれに因て道譽と交んと山僧日吉の興と振
て切に敷奏と云ふ氏止むをねど上総國に流罪と此に抄ひく道譽は信長
奏を傍り國を致さる小及んで多くの孫とて其後を以て兵を衣裝を
うごり三百人斗者を嘗うとを捲りりる中止宿をる毎に妓婦を集り
飲樂し獅も怒りくはは後かく殺されて近江に遷りて十三人の衆とてこれに
たの下に舎は僅ともも頼朝又虎豹の皮を懸り五月に方の盤を看果と
登り櫓をりて茶瓜園より金衣裝を獲かざるをた力のたぐひをそりま

又其のちのち又増妓は秋葉をとりて遂に博愛して一度は教を費を
経し其の家夜毎に不焼の熾燭の流涙を創して門僧の俸禄を充ててよ
と之教をせんく居るなり二年うき率と率六十八の子三人あり秀綱秀定
秀実高秀秀家終に終に秀系極家の元祖と名武功の秀綱は妙法院を焼
拂ひ一罪をせんくんと豊田の郷兵これを討ちたりす

○佐々木氏頼

泰綱が孫に建武三年尊氏及び附氏に於て十一歳に
親言の場は後平年中其氏と義と兵を構ふ附氏に西山の傍に避
て藤原一宗永と改む此後軍功あり又藤山より北嶽を擧ぐ小門を犯
し宮をたれ弘入の附後光嚴院氏に奉じて拒つてむ困て數十人を殺し帝
書の褒賞を給ふ延徳元年二年と義信又興して足利義満の才満高
を養ふて又その近江の守護たり是を六南といふ

○浅井氏

浅井氏 系後波臣其先後花園院嘉吉年中三條大納言公綱後改
く左遷せられて佐々木系中勢少輔持清は秋らる三條家の御知事不
浅井郡丁村に推居て安し一人を生む此子三歳の附勅免され治
て安後豊を其子孤くありて丁野村に成育して十に歳の附持清を野
是を迎て曰我の丁野村流人の子なりは後世に多く秋はこれに持清
くは押入も公卿の子なりは別は郡名取名の世即其里を合カせらる

浅井新治郎重政後新左衛門と名のり其子一人あり新三郎忠政と其子三人あり
嫡男新治郎賢政二男新十郎是三田村の家成後三男新八郎是大野本の家成
とあり嫡賢政三子あり一は新三郎教政後赤尾長尾の尾の二男亮政後尾
かれより上坂の城今溪の城成りてより強大の家とあり亮政は男あり嫡子
新二郎高政は二男新九郎久政後新三郎宮内少輔に男僧とあり智山和尚といふ
二男久政の子は新九郎長政後新三郎是近代の武勇ありて信長妹婿とあり一は万福
九郎あり後信長と親い長政は萬福九郎共小治の城を捕ひて自宮を

○蒲生家

蒲生家 蒲生郡と揚々これを蒲生と名し其子時六代の後惟後平家の以興より上
まゝに及蒲生郡と揚々これを蒲生と名し其子時六代の後惟後平家の以興より上
後賢新左衛門とあり一は一家お目及後後七代の孫蒲生秀頼より又七代乃
末孫蒲生貞秀ありて知雨法師といふ子息三人あり嫡男を蒲生秀頼といふ
お軍義勝といはへる早世と其子及兵衛尉秀紀壯年にして自宮を秀頼の弟
左衛門を及高脚の嫡男定秀は日野の徳武式をえり其嫡蒲生及右郎賢秀は
あり佐々木義賢は属し後織田信長卿は法賢秀の子鶴と代信長卿の婿と
て蒲生忠三郎氏卿と改めて中江伊勢松坂の城をとり後豊臣秀吉公は属し
て奥及會津百万石を領し飛騨守氏卿といふ秀吉は神の蒲生の女を娶たり
織田信長公 天正五年 出雲安芸松山築て住り神て是より五重の天守を築

○織田信長公

石垣上の廣と南と十間とを造営し、天正十年六月十日、明智
智丸馬女を娶ひ、今又、既述の諸候を夫の家を去り、後、い奇と成りて
松見寺と云院に、代々、織田家の庶子を以て今又、い奇と成り、信長其先、平相國
津、並より二十代の進元曆中平氏の一族、悉く、い奇、附、重盛の二男、資盛、一、
を寵愛し、抱せ、尚、國津田の郷に、居、と、資盛、其、附、一、首、の、子、を、滿、り、

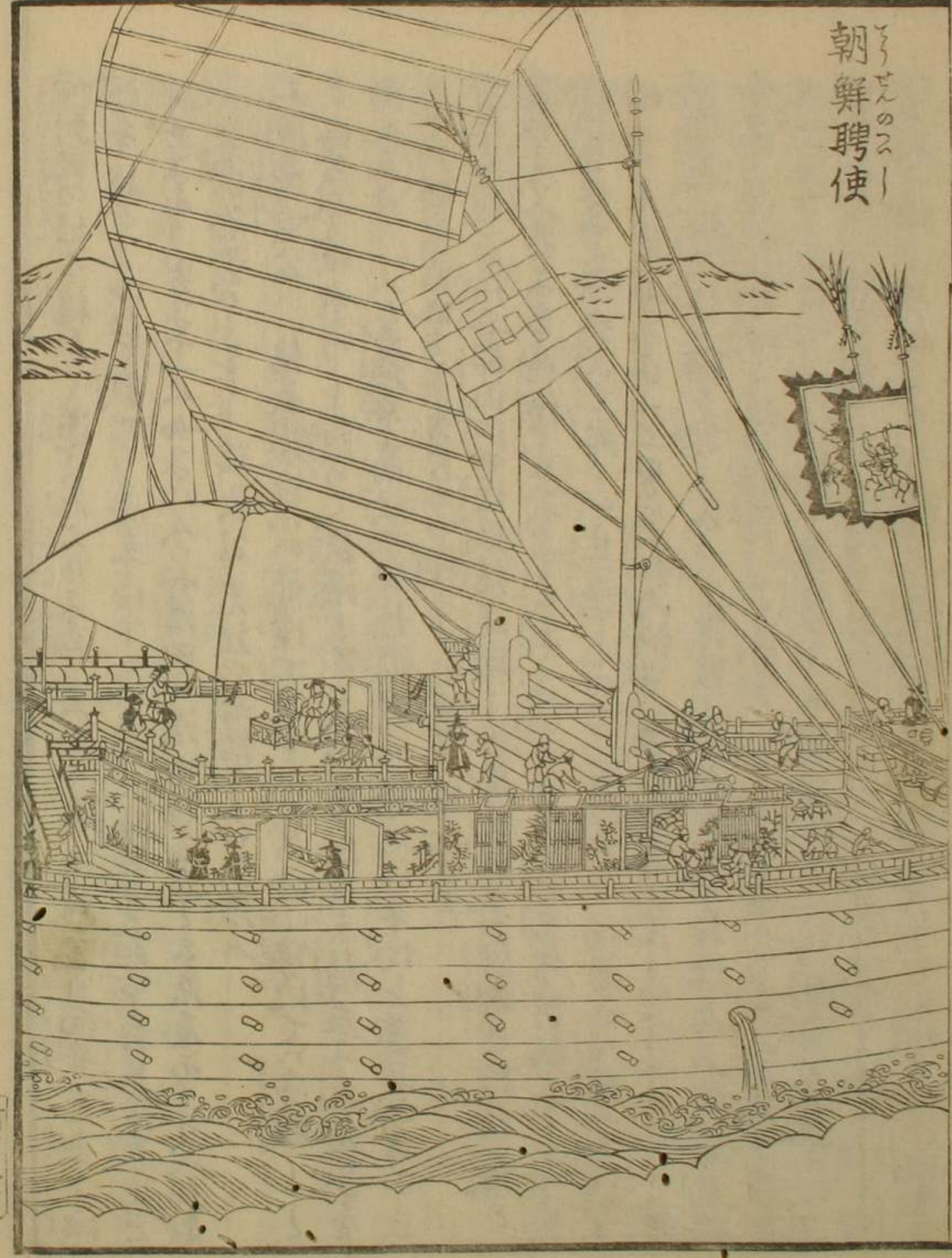
近江、か、り、津田の、入、江、の、と、成、り、一、足、を、ぬ、を、油、を、た、り、か、り、
後、此、を、以、て、後、裔、の、地、と、し、て、か、り、其、子、を、以、て、い、奇、と、成、り、
長、の、妻、と、成、り、家、を、織、田、の、庄、の、神、主、天、下、津、津、の、卷、敷、と、稱、り、
後、入、系、と、成、り、津田の、長、を、宿、と、し、て、因、て、彼、資、盛、の、子、を、以、て、
後、津田、檢、校、親、真、と、以、て、織田の、先、祖、之、代、々、織田の、社、の、神、職、と、り、
後、織田の、守、護、武、衛、義、將、彼、津、田、の、裔、を、以、て、六、奉、終、の、人、と、
を、討、つ、織田の、社、の、修、造、一、又、安、云、云、城、を、築、り、その、ゆ、へ、り、
織田、彈、正、忠、信、秀、子、に、以、て、童、名、を、右、法、師、殿、と、云、天、正、三、年、午、月、九、日、
誕生、月、十、二、年、十、三、日、右、津田の、城、を、以、て、元、服、一、三、郎、信、長、と、稱、り、
始、り、三、及、右、良、大、渡、の、軍、に、後、十、五、日、か、り、後、入、道、三、の、女、と、娶、
十六、歳、少、く、上、総、女、と、稱、り、永、禄、十、一、年、軍、功、の、由、を、以、て、
附、九

桐引西の段を揚い、遂に大谷に、天正十年六月二日、向守光秀、
陽本、能、寺、の、地、に、以、て、裁、せ、り、附、年、に、十九、紫、野、大、德、寺、を、
謚、と、り、男、子、十、一、人、女、子、八、人、小、津、田、は、津、田、檢、校、を、
と、之、者、の、屋、敷、と、し、り、信、長、公、先、祖、の、居、地、と、し、り、

大谷秀吉公 信長の時、江、の、守、護、不、と、し、小、谷、の、城、小、勢、に、て、
と、城、今、今、深、み、り、一、改、り、長、渡、と、号、と、此、前、江、及、未、靜、左、
御、五、三、り、一、人、若、狭、守、高、次、一、人、丹、波、と、此、後、近、江、平、均、と、
月、に、江、及、の、右、城、と、も、秀、吉、云、の、仰、り、て、悉、く、破、却、と、
其、先、江、及、津、田、郡、山、門、の、住、侶、後、遂、俗、一、七、尾、張、國、
國、名、と、り、其、子、高、侍、と、い、ふ、と、云、一、信、長、其、先、中、村、孫、
秀、吉、其、子、孫、以、て、死、り、て、其、妻、其、子、を、以、て、信、長、の、
嫁、一、二、男、一、女、を、生、じ、一、男、大、和、大、納、言、秀、長、
秀、吉、二、位、法、印、一、路、が、妻、と、成、り、一、秀、吉、云、の、
下、加、美、清、尉、之、御、一、仕、一、膽、大、一、勇、才、あり、
又、仕、本、下、及、右、郡、と、い、ひ、度、く、武、田、有、り、
字、と、成、り、て、那、波、流、義、守、と、い、ひ、り、天、正、十、年、
て、お、お、い、任、ト、を、以、り、月、を、退、て、海、一、
船、解、大、明、ま、も、切、な、び、け、



大岡のあまの仁徳
 天皇の都の御法
 三韓の王又
 唐の御門より
 もさけ浪濤
 をまけて我國
 入貢するの御功
 皇居の御影



朝鮮聘使

ひーと押り又はけき等が河にをさへて世々人ノヒカタリ
大抵ノ世々ノ人ノヒカタリ
 月夜もあけて押るればと時かれやひくもくわりともせひるるれ竹
北山
 の子 此河を花のよこの殿を聚樂せ給ゆとてひさきのくしに於
 かしてんいすかとなるべし。我こそをいふ北斗とさうらふと
不
 ひきふさうも押るるるるるるとの流ひも河をけきせ
配今元ニ
 らんべと日をさしてきこぬまばとそりて國くけりもまじりぬ。此
 河をさけけりともさへ大和も唐もさるるもあつたりんや
コナコトアルカアルヒ
下
中
ヨリ
 を人のこころをみ回成りてゆらんやひろろろろろろろろろろろろ
今ノ治世ヲ云
今ノ治世ヲ云
今ノ治世ヲ云
今ノ治世ヲ云

○傳教大師

俗姓三津氏志賀郡の人なり名曰最澄と云其先の後漢獻
 帝の裔なり日本應神天皇の御宇此國に來りて法華經をたゞりたり
 最澄の其子孫百技の人の子に神護景雲元年の誕生とて徳明

則奇異人を嘯嘆せしむ十二歲にて大安寺に表法師を師として得度と
 延暦二十三年入唐求法の勅を蒙り遣唐使菅原清公に後唐徳宗
 の朝に参り台州に赴き天台山に登り國法寺道邃和尚より一心三觀の旨
 を授かり於滿眼曉ると見え三師灌頂密教又陀羅尼經書印契圖經
 達磨の一流牛迹山の法をも得て延暦二十四年帰朝し天台諸の教文を
 天子に獻じ此小抄ひく勅して悉く書寫し七ノ寺にも配ち他諸寺迄
 より天台の宗旨を密宗と稱し始り叡山一乗止觀院を草創し弘仁十二年六月
 日中堂院を抄ひて遷化せる年又十六貞觀八年傳教大師と謚を賜はる
叡山延暦寺の号ハ本寺ニ在リテ勅許せらるる中書連立の符大版の流あり勅をみり撰らる
阿彌多羅三藐三菩提の佛より我々の師に宣加りし誓縁人
 ○服治貞宗 元應建武の比より高本に任居りてま本長尾郎とら又後本
 とら本にも任り二十又歳の時相殿よりて改宗の誓子とありすとら弘光
 徳りて自ら教を授けりて遠國に達達と此外有國勢回立郎光包など皆
 國中巨魁の如きなり

○大石玄良

内務の良雄が祖名を玄良と名けて大石村の人なり
 玄蕃の知知を知らずのみ良を大石と稱す人々大石三郎の内中村に居
 坐路あり即東村津太守の大石三郎の善提也

孝子元政

身延紀行

昔の徳田まをとのみ
 御壺の奉終と申しん
 抄かくとまうりて宿も
 かりとつら金谷
 泊於累々一面土の
 ふるるの魯論乃
 むとばをりてよ
 やれとのんとん
 ところをやとん
 かつら其が
 それとんんんん
 ちひひをよ
 新んん
 いよ〜んん
 まの白雲
 世日晚あかりて母の
 後〜と終を針灸



附註

うどこく〜んん
 よ〜ぬん



原長吉秀卿よりして子種の子孫平氏朝小園の初りより節忠綱が縁といふは
獅子飛らぬ国をといふ活義の首原三俊朝政が堂を拒む此不を今園の
津とらひく石の南之是男石三卿の入口之又男石の邊とい獅子飛の南之後
み大石の改心渡七郎良遠信と見も子種が末之嫡家を大石三郎を清とい
横谷と津城之二男を伸といふ是大石良雄等が祖之三男を朝といて一家と
之も清時を仕へて將軍義勝卿持本谷へ沖移の府大石三卿の儲きを
引て供奉せり天文の一乳は大石堂討死して子孫之威を討ふ小山金右衛門
と云はる小山朝政が末は秀卿が裔大石とい流るを引て小山金右衛門
大石金右衛門と稱し其流が末は子種といふ其子種内良豊といふ其子種内良雄
久右衛門といふ其子種内良長といふ其子種内良長といふ其子種内良長といふ
両家とも清時を仕へて此流今系師は清時と伸るを引ていふ今
本卿大石といふ

○僧元政 母石の産之は道種洛陽の人元政姓は菅原氏石丹元和九
年癸亥二月廿三日洛の一宗は生る小字を俊といふ俊は龍聽明普通の儀は
異之六歳にして秘て書と清元秀といふ小字根の堀之中は丹修を考ふ
事小俊八歳にして武を兄の如く學ぶ十三歳直考振て左右の侍せらる

○蓮上人の影像を祀して三つの額を授けしは我必出家せん二つといふ
母の妻長くして我孝を竭せん三つといふ法華の三大部を讀むを願ふ
慈安元年成子歳二十六素懐を遂て剃髮と法名曰政字の元政は法名
赤堂妙子不可思議といふは縁と洛小娘の寺の大僧都日豊と師と
一法華の真首を受く明曆元年の秋源法塔寺の持斎といふと
創して居るは光光寺と号と法衣を脱ぎ長時持律の教を
うけるは心菴をうくるは双親を喜ばし竹系庵を設け後座請願す
本より内外の學を熟し和漢史譜を通し風雅の心を養ふを志す
座外父母の傍に離れ旅の終り母を後々の吟嘯といふは生涯附會の
説を語りて人と愚昧の言を捨て守りて嘗て著ると不の善藉也といふ
萬治元年の冬歳八十七歳にして年と寛文二年の冬母を八十七歳
て天年を終る孝心のあり哀感推て尋るる先妣二十七日の冥福と修
ての後儀といふは所て遂は後後の法行傳と曼陀羅を書きしは附
惠明といふは寛文八年成申二月十八日歳は十六和号一首綴り心香とい
を撰しり送るの旨はまうせしは心香の創りは心香といふ

○北村季吟 小村の産人拾徳軒成呂房と号と國學を貞徳と受和欽

連分を若し余の讎備を就ふ平安又糸織成郷の市路玉津傳の社の廟撰
也後又台命よりして京都よりして教習をたてて法印を叙せられ再冒瀝を
男と兼て右書に注釋を加へて著述せられたるものなり

八代集抄 多系拾穂抄 伴勢 拾穂抄 百人一首拾穂抄

源氏湖月抄 枕草紙春曙抄 朗詠和歌集注 増補題林抄

土佐日記抄 右印板 多系不抄 男湖春の書之伝字書

○猿九大夫 旧路回とあり 俗世の人のとらふ事 又ハ族胤も明るに

あり和子の家ハ虚浪少りす蓋ハ世の流遷者ありん 又是と流遷を

とらハ非たり猿九録を多系柳奥との和子の一首ハ純て山荘の赴き成とあり

附言 茨山集 猿九の旧路を多系記あり其大意成とあり

勢田の橋を多系と南入りて中松下を出ては又沿て大日とありて見

下せハ供御の瀬ありて又津より田上川を流して国津とありて大石のあり此大

石安の親娘へ 又川み弄石を巧婦人仕のありて夫より一ッ拾成渡

りて極岩とありて祠あり極岩の宮とあり右本本林より此宮の後と麻花

とあり其岩隆壽とあり極岩の宮とあり流あり盛のありて激石系のありて百谷

とあり右の極岩と名つ其台とあり曾東村より勢田より三里余とありて

